四国大学学際融合研究所年報　第１号　43－52（2020）

# 自然環境との相互作用により育まれる子どもの特性に関する検討

原 田 美 代 子

# A Study of the Characteristics of Children Nurtured by Interaction with the Natural Environment

Miyoko Harada

抄　　録

自然を活用した保育実践は活動内容や子どもの育ちが報告されているものの，これらの知見を統括し分析した論文は少ない。そこで自然を活用した保育が，研究として頻繁に取り上げられるようになってきた2010年前後から報告されている研究内容を育まれる特性についてKJ法を用いて分類し，活動内容の特徴について検討した。その結果，28の研究から，主体性・自己肯定感，協調性や創造性など12の特性が育まれていることが明らかとなった。

キーワード：自然環境，自然を活用した保育，心理的特性，KJ 法

## Ⅰ，問題・目的

乳幼児期の保育実践は，「環境を通して行う」ことが重視されており，「保育所保育指針」や「幼稚園教育要領」，「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」（以下，３法令）の基本や原理として明記してある。それにより保育者は，子ども一人一人が環境構成の主体として存在し，自らの意志によって遊びを見つけ，試行錯誤したり遊び込んだりできる活動を通して，資質・能力を伸ばしていく保育を実践していくことが求められている。

2017年に改訂された３法令では，この育みたい資質・能力を具体的に，「知識・技能」の基礎，知っている知識の活用に関する「思考力・判断力・表現力」の基礎，どのように社会や世界と繋がり，自分の人生を輝かせるかの要素から成る「学びに向かう力，人間性等」の３つの柱として示されている[1,2,3]。この資質・能力は，未曾有の震災や自然災害，激動する気候変動，COVID-19に代表される未知のウィルス等，そしてそれによる環境や社会の転換等，今までに経験したことのない事象が生じる社会となっていくことが見通されており，このような社会でも，子どもたち一人一人が他者と共に生き抜いていく力として掲げられた。

またこの資質・能力は近年注目されている非認知能力とも大きく関連している。そもそも非認知能力とは，認知能力と称されるIQなどの知能指数で測定される知的能力や学力以外の力とみなされており，OECD[4] では「社会情動的スキル」として，「目標の達成」「他者との協力」「情動の抑制」等の下位カテゴリーが示されている。つまり，より具体的に表すと「目標や意欲，興味･関心をもち，粘り強く，仲間と協調して取り組む力や姿勢を中心とする力」と捉えられる[5]。

「知識・技能」，「思考力・判断力・表現力」は認知能力，「学びに向かう力，人間性等」は非認知能力と捉えられている[5]。特に幼児期においては，就学後から始まる学習に向けて，様々な事象に対する興味，関心の芽を育て，共通の目的に向かい協働して活動する楽しさや挑戦することで味わえる達成感を得ることが重要視されており，これらはまさに非認知能力が示している特性であると考えられる。

この非認知能力を育む有効な方法の１つに自然体験が挙げられる[6]。幼少期に動植物と関わる経験が豊富なほど，高校生になると他者への共感力や，様々なことへの挑戦心，人間関係能力が高くなることが報告されている[7]。この自然体験を重視し，自然を活用した保育実践の代表的なものに森のようちえんがある。日本では「自然体験活動を基軸とした子育

て・保育活動の総称」と定義されており，森だけでなく，海や川や野山，里山，畑，都市公園など，広義にとらえた自然体験をするフィールドを指している[8]。本研究では，自然を活用した保育実践と森のようちえんを同義のものとみなしていく。

森のようちえんは1950年代にヨーロッパで生まれ，1980年代に日本に普及したとされている。日本の森のようちえんには大きく「通年型」,「融合型」,「行事型」の３つの形態に分類されている[9]。ほぼ毎日森の中で保育を実践し，園舎をもたず森や野原など様々なフィールドを保育の場とする園も多い「通年型」森のようちえん，園舎を持ち，定期的に森や自然を保育の場としている「融合型」森のようちえん，行事として定期的に地域の子ども達を集め，環境教育的な活動を実施する「行事型」森のようちえんである。

「通年型」森のようちえんを中心とした一日のほとんどを森や自然で過ごす子どもは，一般的な保育施設で過ごす子どもよりも，欠席などが少なく健康状態が良い，運動能力，集中力，遊びの多様性や創造性等が高いことが報告されている[10]。また，就学しても，森のようちえん出身の子どもは，授業に対するやる気や集中力，さらには授業への質問的態度や学びへの興味や関心がクラス平均よりも高く，一般園を卒園した子どもよりも上回ることが報告されている[11,12]。このように，幼児期における自然体験活動が子どもの発達，健康状態や学力等に肯定的な影響を与えていることは様々な研究から示されている。このような森のようちえんの研究は，2010年前後から頻繁に取り上げられ，豊かな子どもの育ちが報告されるようになっている。

これらの知見により，森のようちえんは，現在の幼児教育の在り方に新しい潮流をもたらしていると同時に，幼児期の子どもにとって，自然と関わることの重要性を改めて提示していると考えられている。しかしこれらの知見を統括し分析した論文は少ないのが現状である。

環境白書では[13]，子どもの遊びは屋外から室内へ，多様性から画一化による質的変化が，さらに遊び場と遊び時間の減少による量的変化が端的に指摘されている。家庭において自由に遊べる戸外や自然環境が減少し，自由な遊びの時間も減少しているからこそ，１日の多くの時間を過ごす保育現場では，子どもに豊かな活動を補償していくことがさらに求められている。また，子どもの自然活動の重要性については保育者も実感している一方で[14]，全ての保育施設が豊かな保育環境を備えているわけではない現状がある。むしろ保育環境に自然物が不足していると感じている保育者は多く，自然を保育に取り入れる難しさを感じているという知見もある[15]。

そこで本研究では，子どもに様々な学びをもたらす自然を活用した保育を代表する森のようちえん研究を取り挙げ，どのような実践や環境が，子どもにどのような特性を育んでいくのか分析していくことを目的とする。この検討を通して，幼児期における自然活動の重要性について改めて提案し，一般園で導入していくための示唆を提案する。

## Ⅱ，方法

日本の森のようちえんの実践は，前述の通り2010年前後から増加している傾向にある。そこで本研究では，2009年から2019年までの自然を活用した保育に関する研究のうち，カリキュラムや制度，保育者養成に関連するものを除外し，保育実践や調査研究の知見を整理していく。

まず，国立情報学研究所が提供するCiNii Articlesにより森のようちえんに関連すると思われるキーワード,「森のようちえん」,「森の幼稚園」,「ネイチャーゲーム」のワードで論文検索を実施する。検索に上がってきた論文の中で，保育実践の記述と，それにより育まれる子どもの特性に関する記述を抽出し，活動内容や取り環境の要素から，育まれる子どもの特性について分類した。本研究の最終目標は，一般園での自然を活用した保育の展開への可能性を考察していくことにあるため，活動実施主体を民間団体ではなく，保育施設で実践されている研究に限定し検討した。

## Ⅲ，結果

### １，論文検索結果

CiNii Articlesで検索した結果,「森のようちえん」

では79件,「森の幼稚園」では65件,「ネイチャーゲーム」では79件の計223件であった。森のようちえんは近年，地域創成に絡め,「森のようちえん認定制度」を実施している地方自治体が増えている。研究では，それに関連するものや[15]，森のようちえん自体の解説や紹介[16,17]，保育者養成に関係する検討[18]，諸外国の実践紹介[19]，保育雑誌の記事紹介等が多かった。次に,「森の幼稚園」では，諸外国を中心としたカリキュラムに関する論文が多く[20]，次いで保育者や保護者，学生を対象とした調査研究が散見された[21,22]。「ネイチャーゲーム」に関しては，保育者養成の観点から学生を対象としたものや[23]，小学校への実施プログラムの検討[24] が大半であり，自然を活用した保育実践は少数であった。

本研究で分析の対象とした論文は，保育施設における実践研究と思われる47の論文のうち，カリキュラムへの検討や制度の変遷，幼児教育への提言など18の論文を除く，28に絞り検討した。

## 2，実施主体の分類

日本の森のようちえんの３分類のうち，本研究の分析対象になった論文では,「通年型」森のようちえんの実践は20事例であった。ただし，ほとんどの施設が園舎を備えていた。一方,「融合型」森のようちえんは３事例であり，具体的には，週何度か森の日などを設定し，その他は通常保育を実施していた。「行事型」森のようちえんの５事例は，保育施設が休日等に園開放を行い地域の親子を対象とした実践研究であった。

以上のことを踏まえると，我が国の保育施設における森のようちえんに関する研究動向としては,「通年型」森のようちえんの実践が大半であった。遊びを豊かにするためには，３つの間，即ち“空間”,“時間”,“仲間”が重要である。「通年型」森のようちえんにおいては，広い自然環境，自由な時間設定の中，自分で活動を決め，比較的少数ではあるが日々活動を共にする仲間がいるため，これら３つの間が確保されやすいと考えられる。しかし,「融合型」森のようちえんでは，日々過ごす“仲間”は確保されているものの，森での活動以外の保育では自然環境や給食時間やディリープログラムにより，活動時間の自由は確保されにくいことが考えられる。同じように，地域の親子で参加し開催される「行事型」森のようちえんでは，自然の中で実施されることが多いため“空間”は確保されるものの，内容や時間配分への自由度，そして気の合う仲間との活動には限界がある可能性が考えられる。そのため,「融合型」や「行事型」の活動で育まれるものは「通年型」森のようちえん」とは異なることが予想される。しかし，森のようちえんの３分類の研究数に差があり，分類毎に育成される特性を比較することが困難であることを踏まえ，３分類を込みにして検討することとする。

## 3，自然活動による子どもへの効果

分析対象となった28の論文から，特に考察部分を中心に，子どもへの効果に関する記述を抽出し，KJ法を用いて分類した[25]。分類の結果をTable1に示す。

Table 1 自然活動による効果の分類

| 分類項目 | 数 | % |
|---|---|---|
| 主体性・自己肯定感 | 10 | 13% |
| 感受性 | 11 | 14% |
| 協調性・思いやり | 10 | 13% |
| 健康・運動能力・体力 | 6 | 8% |
| 興味・知的好奇心 | 7 | 9% |
| 創造力・想像力 | 7 | 9% |
| 問題解決 | 3 | 4% |
| 生命尊重・環境観 | 7 | 9% |
| コミュニケーション力 | 4 | 5% |
| 挑戦 | 6 | 8% |
| 忍耐力 | 3 | 4% |
| 認知能力・学力 | 4 | 5% |
| 合計 | 78 | 100% |

「通年型」森のようちえんでは，子どもはその日の遊びを自分で決めることはもちろん，食事時間や食べる場所を含め，自身で決定している[26]。一般園のように，既製の遊具やおもちゃがない森の中での活動においては，何をしていいのかわからず，やりたい活動が見出されず，何もしていない子どもの姿が見られることがある。森のようちえんは，このよ

うな場面を遊びを見つけようとしている時間として大切に見守っている[27]。このように多くの実践で，保育者は禁止や仲裁等を極力行わず，子どもの育つ力を信じて見守る保育を大切されていた[28]。このような保育実践からは，子どもの主体性が育まれ，常に育つ力を信じ寄り添う保育者の存在により，主体的な行動を支える自己肯定感が育まれることが報告されていた[29,30]。

また，変化に富んだ自然との関わりによる感受性や豊かな見立てによる遊びから，創造力・想像力が育まれることが報告されていた[31,32]。例えば，散歩の途中に見つけたタニシを集め，その匂いからお魚屋さんが展開され，葉っぱのお金でお買い物をする事例が報告されていた。子どもが自然の動植物を様々に見立て，嗅覚などの５感を使い遊びが展開している様子から，これらの力が育まれると解釈されており，さらに見立ての豊かさから，感性の豊かさにつながることが報告されていた。これらの特性は，既製の玩具のように遊びの方向性を示すことがなく，また一つとして同じ形状や大きさ，そして豊かなテクスチャーを持つ自然物を用いて遊ぶことで培われていくのだと考えられていた。

さらに，刻々と変化し，偶発的に出会う様々な動植物を，見たり，聞いたり，匂ったり，触ったりと，五感をフル活用して感じることで興味・知的好奇心が育まれていることが報告されていた。散歩の途中で見つけた蛇の抜け殻を触り，匂い，大騒ぎをする子どもたち。偶然みつけたムシコブを割り，以前拾った根をだしたドングリとまじまじと見比べる。根の出たドングリを逆さにして土に埋めてやる姿など，どのように植物が土に根付いていくのかを確かめる姿など，様々な実践が報告されていた[32,33]。柳原[34]は，このような子どもの姿から，観察により発見したことが更なる興味をもたらし，知識が深化していくと述べており，このような観察スキルをサイエンス・プロセス・スキルの一つと見なしている。

また，起伏に富んだ自然は運動量を増やし，それと共に体力や運動能力を向上させる効果が報告されていた[35]。また，戸外でしっかり体を動かし遊ぶことで健康な体づくりができていることが実践研究から報告されていた[36]。前者の研究では子どもたちに万歩計をつけたり，体力測定を実施したりして得られたデータを，全国データと比較することにより，統計的に検討したものであり，実証的なデータで示されている。自分の力量にあわせて木や坂道を登ることで，しなやかな身体づくりや体力につながるのだと考えられる。しかし，森の活動と運動能力に関しては効果が確認されない。育まれた体力は就学後１年足らずで有意差が確認できなくなる知見が報告されており[37,38]，これらの研究についてはさらなるデータの蓄積が求められる。

森のようちえんの活動は異年齢で行われることが多い。そのため，同年代の子どもはもちろん[34]，年下の子への配慮，年下の子の年長児への憧れによる行動[32,39]などの姿により「協調性」や「思いやり」が育まれることが報告されていた。例えば，年少の子どもは，急な坂道を勇ましくのぼる年長のお兄さんの姿を見守り，自分の力量に応じた緩やかな坂のぼりをしてみる。その時，年長のお兄さんは，年少の子に手を差し伸べ，登り切ったときには共に喜びを共感する姿が報告されていた。また，浜田[40]は，常に自分の能力を超える自然の中で，自分のやりたいことを実現するためには，他の子どもとの協力を得ることが必要となるため，自然と関わりや相互交渉が増加し，コミュニケーション能力の育成につながると解釈していた。

さらに，寒さ厳しい季節における森では，寒さから，泣きながら森の中を歩き続ける日が続く中で，次第に寒さに対応する心や忍耐力が身に付いていくことが報告されている。また，観察したい昆虫が飛来してくるのをただひたすら待ち続け，その瞬間に出会った喜びが記されていた[30,41]。また寒さをどのように工夫し，楽しい活動に変えていくか考えたり，他者との価値観の葛藤を経験する中で，解決のための代替案を考案したりする問題解決への志向性も高まってくることが報告されていた[26]。

最後に，ネイチャーゲームなど，様々なゲームを通して自然と楽しく活動する実践研究では，集中して探索することによって記憶力が向上することが示唆されていた[42]。また，自然への知識が５歳児にな

るにつれ顕著に高くなることが保護者調査から報告されていた[29]。実際，就学後の学力と比較しても，認知力や学力は，自然体験が多い子どもの方が高いことが報告されている[10,12,35]。

## Ⅳ，考察

森のようちえんをはじめとする，自然を活用した保育研究は，事例研究，実践研究，調査研究など多くの報告がなされていた。これらの研究から，幼児期の子どもは，自然を活用した保育により，主体性，自己効力感などを始めとした12のカテゴリーの学びが確認された。

これら豊かな学びを成立させている保育環境や保育実践について考察していく。まず保育環境である。やはり豊かな自然により，子どもは様々な探索行動や試行錯誤する機会が増加し，その結果としてコミュニケーション力や創造性や問題解決能力など多くの特性が育まれると考えられる。言い換えるなら，子どもが自然に対して様々な行動を取るのではなく，自然が子どもの豊かな行動を引き出しているという捉え方もできる。これはアフォーダンス（affordance）と呼ばれ，アメリカのジェームズ・ギブソン[43]により提唱された。「環境の持つ形，色，材質などの属性が，その環境自身をどのように取り扱っていたらよいかについてのメッセージを発している」という視点で環境を捉える理論である。自然物や自然環境の子どもへの影響について検討したり，子どもの遊びを説明したりするための有力な理論として研究に用いられている[44,45]。例えばZamaniら[46]は4-5歳児の行動マッピング分析することで，戸外の人工物と自然物とで，遊びがどのように異なるかを検討している。その結果，自然のルーズな要素は，目的を持った機能的な遊びを引き出しやすく，さらに言葉やイメージを用いて創造的な遊び，そして探索的な行動を引き出していた。対称的に，人工的で固定的な要素は，ほとんどが１つのタイプの機能的な遊びをもたらしているのみであることを報告している。つまり自然経験が子どもに豊かな育ちをもたらすとは，自然が子どもに豊かな行動を引き出し，その結果として豊かな育ちに繋がっていると考えられる。

次に保育実践である。ここでは，保育実践でも子どもの遊びではなく，遊びを支える保育者の存在，関わり方に着目する。保育実践の多くに，保育者の視点が考察されていた。多くの実践で，保育者自身も葛藤しながらでも，子どもの育ちを信じあえて見守る，乗り越えていくことを信じあえて手をさしのべないという子どもに寄り添う保育が展開されていた。自然を活用した保育実践を行う保育者の調査でも，多くの保育者が子どもの育つ力を信じ自由な活動を見守ること重視していることが明らかになっている[48]。

寒さに耐えられず涙している子ども[41]，遊びが見つけられず何もしていない状態の子どもがいた場合[27,47]，一般園であれば，保育者が温かく過ごせる方法や興味を示すと思われる遊びを提案する関わりが求められる。きまりが守れなければ諭し，仲良く遊べるよう提案したりする。しかし一般園の保育者でも，自然の中ではおおらかな気持ちで子どもと関わることができる変化を感じていたり，先回りして手を差し伸べるたり制止したりする日々の保育を見直す契機となっていたりすることが報告されている[49]。子どもの育つ力を信じ寄り添いながらも見守る関わりだからこそ，子どもは安心して自分を発揮できる。また，保育者から信じられているという確信は自分への信頼に繋がり，挑戦や他者を信じる力や思いやる気持ち，協調する心が育まれていくと考えられる。さらに，保育者からの提案や示唆，日常のきまりが少ないからこそ，自分たちで考え，判断し，行動する事が多くなり，問題解決能力が育まれていると解釈されていた。子ども自身が自分の力を信じられるからこそ，自分で判断し行動もできるだろうし，その結果がどのようなものでも，自分で受け止め，粘り強く取り組む姿が培われるであろう。

このように，自然を活用した保育実践が改めて重視され，現代の保育に対して新しい潮流や新しい価値を投じているといわれている理由は，以下の２つがあると考える。

本研究で検討した自然を活用した保育研究では，無藤[5]が示した非認知能力「目標や意欲，興味・

関心をもち，粘り強く，仲間と協調して取り組む力や姿勢を中心とする力」に関する姿が自然に実践され培われていた。一般園での保育では，保育者が子どもの育ちに応じたカリキュラムを組み，環境を整えることで，子どもの主体的な活動を引き出し，これらの力が育まれるよう配慮されている。一方で，今村は[9]，保育者の意図を込めた関りや教育的配慮が排除された活動が森のようちえんの魅力であるとしている。これらのことを考慮すると，保育者によるカリキュラムや教育的な関わりが少ない状況であっても，自然環境は，子どもが本来備えている非認知能力を育む力や行動を誘発していくと考えられる。つまり，自然を活用実践は，子どもが自ら育つ力を引き出すことができる実践であることが１つ目の理由である。

２つ目の理由としては，自然の中では本来あるべき子どもの姿が見られるからである。成長発達には順序があり法則性がある。例えば，這い這いは単に子どもの移動手段の獲得というだけでなく，次に見られる歩行のための筋肉を鍛え，歩行のロコモーションの感覚を身に付けるために重要な過程である。身体発達だけでなく精神発達においても，エリクソンの漸成的発達理論やフロイトの心理性的発達理論では，その発達段階でしっかりと発達課題や育ちを積み上げていかねば，次の段階の発達に支障をきたすという特徴がある。

現代の子どもの多くは習い事を持ち，親や先生が設定した生活時間の中で生きている。多くの子どもを少ない保育者や教師で実践する場合，スムーズにクラス運営できる方法, 効果的な保育実践や環境配慮, 一斉授業を行わざるを得ない。生活上では活動や食事の時間・内容・場所など，様々な場面で大人が決めた既存のルールやきまりが与えられている。このような状況下では，子ども自身が自ら思考する必要はなく，そのルールやきまりの意味を考えるまでもなく，それを守ることが期待され価値づけされているため，子どもはそれに従っている。子どもが自由に遊ぶ時間，豊かに遊ぶ環境も少なくなる中[13]，学童期の鬱や不登校といった精神病理を抱えるこども も増加している[50]。また，内閣府の我が国と諸外国の若者の意識に関する調査[51] でも，自分に満足できず，自分の考えを表明できない若者の姿が浮かび上がっている。つまりこの状況は，人格形成のそれまでの段階で，うまく成長・発達を積み上げられていないことが原因の一つとして挙げられるのではないだろうか。そして，学童期に鬱や不登校が増えているならば，それ以前の段階で健全な育ちや成長に課題が残っていると考えられる。

後進国を対象に全ての子どもの命と権利を守る活動を行っているユニセフ（UNICEF：国際連合児童基金[52]）は,“子どもらしく”過ごせる「子ども時代」を守ること掲げ活動している。「子ども時代」を“子どもらしく”過ごすことが，健全育成につながると考えられるからである。我が国の子どもの問題や精神病理をみると，後進国の子どもとはまた異なる意味で,「子ども時代」を“子どもらしく”過ごせていないのではないだろうか。

倉橋は『育ての心』でこの“子どもらしさ”や子どもの真正を『涼しい顔』と称し，次のように描いている[53]。

・・・幼児たちの顔，何という涼しさだろう。此の日中を駆け歩き飛び回り, 遊びつづけていながら, 何という涼しさだろう。焦らない心は涼しい。もだえない心は涼しい。鬱積せる愚痴, 追いまわす欲念, 密閉せる我執，塗りあげる虚飾。思っただけでも蒸し暑いが，それが幼児にない。忘れた我。事に即し今に生きる真剣。熱風裡に居て熱を知らず，汗にぬれて汗を知らぬ幼児の顔。今鳴いている一匹の蝉をねらって，万象無に帰せる幼児の顔。悟道の極ではないが，何という心の涼しさだ。それにしても，なんと暑くるしい我等の顔。・・・

夏の蒸し暑さを愚痴る大人とは対照的に，それをものともせず，時に活発に駆け回り，時に我を忘れて没頭し遊びこむ姿を捉え，“子どもらしさ”と書き表している。まさに，自然を活用した保育実践研究の事例に見られた子どもの姿と重なる。研究では，今，この瞬間，瞬間を真剣に，“子どもらしく”たくましく生きている姿が報告されていた。つまり，自然を活用した保育実践は, 幼児期に必要とされる, 子どもたちが“子どもらしく”過ごすことができる

ことを示唆している。

このように，自然を活用した保育は現代の子どもに豊かな育ちをもたらし，幼児教育に一石を投じているものの，それを一般園に適応するには様々な困難さがある。

森のようちえんを中心とした自然を活用した保育実践では，一般園と比較して一人一人の育ちや思いに丁寧に寄り添えるだけのマンパワーがある。実際，森のようちえんと一般園の子どもを比較した調査においては[10]，調査対象者数は均一であったものの，在園人数の平均が森のようちえんは19人，子ども3.8人につき１名の保育者が配置されていた一方，一般園は180人，子ども12.8名につき保育者１名と大きな差異がある。

また，全ての活動を子どもに委ねられる時間的な余裕が確保されているからこそ，子どもの主体性を限りなく尊重することができる。一般園では季節の行事や体操教室，英語などの活動を定期的に行っているところも多く，日々充実した保育計画が組まれている。そしてそれらには，活動に対するねらいが設定されており，ねらいを達成するための保育者の関わりがなされている。充実した保育内容，丁寧な保育者の教育的関わりは，３法令でも示されており，保護者からも期待されていることである。そのため，森のようちえんのような子どもの主体性を最大限尊重し，見守り寄り添う保育実践をそのまま一般園に持ち込むことは人的・物的環境，時間的，そして社会的期待の側面には，乗り越えていくべき課題がある。

一般園が森のようちえんのような自然を活用した実践や保育を導入するためには，上記のような課題があり，さらに保育者自身に自然経験が少ないために保育への活用について難しさを感じていることも示されている[54]。また，自然経験が少なくなく，既存の玩具や提案される遊びに慣れた子どもにおいては，豊かな自然での遊びの楽しさを味わう前に，気持ち悪さや退屈さなどが勝ってしまうことも考えられる。このような状況においては，自分の五感を使い自然と関わる楽しさを感じられる準備段階が保育者にも子どもにも必要になってくるかもしれない。

保育環境の抜本的な改善や保育者数の基準を変更することは難しくとも，保育計画において子どもの自由度を上げる工夫はできるであろう。そして保育者が設定した中での子どもの主体性を担保するのではなく，子どもの主体的な活動や子どもの「やりたい」に，保育者や保育内容をどこまで譲ることができるのかを見直すことも可能であろう。保育者が提案する活動を，子どもがやりたくなるよう仕向けたり，子どもが楽しく思えるように工夫したりすることも重要である。しかし本来子どもの持つ，“子どもらしさ”を発揮できる保育について，自然を活用した保育研究から自分の保育への適応可能性について考えることだけでも意義深い。これからの時代で求められる力，認知能力を培う力の基礎となる非認知能力を培うためも，自然と関わる保育で培われる子どもの育ちとその保育方法の一般園への適応可能性を検討する時期に来ているのではないだろうか。

## 引用文献


１．厚生労働省 , 2017, 育所保育指針 .

２．文部科学省 , 2017, 幼稚園教育要領 .

３．内閣府 , 2014, 子ども・若者白書 .

４．OECD, 2015, Skills for Social Progress: The Power of Social and Emotional Skills: OECD Skills Studies.

５．無藤隆 , 2016, 生涯の学びを支える「非認知能力」をどう育てるか これからの幼児教育 , 18, ベネッセ教育総合研究所 .

６．征矢里沙 , 2018, 世界の幼児教育と「森と自然をかつようした保育・幼児教育」の潮流 . 森と自然を活用した保育・幼児教育ガイドブック , 公益財団法人 国土緑化推進機構 , Pp.22–24.

７．国立青少年教育振興機構 , 2010, 子どもの体験活動の実態に関する調査研究報告書 .

８．NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟 . NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟 . http://morinoyouchien.org/.（2020年11月参照）

９．今村光章 , 2011, 森のようちえん 自然のなかで子育てを , 解放出版社 .

10．松好伸一 , 2016,「森の幼稚園」が子どもの発達に及ぼす影響に関する研究 , 東北大学修士論文 .

11. Gorges, R, 2000, Waldkindergartenkinder im ersten Schuljahr-eine empirische Untersuchung, Eigenverlag.
12. Peter H ¨ afner ピーター･ヘフナー（佐藤竺訳）, 2009, ドイツの自然・森の幼稚園：就学前教育における正規の幼稚園の代替物 , 公人社 .
13. 環境省 , 1996, 図で見る環境白書 . 環境省 .
14. 田尻由美子・無藤隆 , 2005, 幼稚園・保育所の自然環境と「自然に親しむ保育」における課題について - 広域実態調査結果をもとに , 乳幼児教育学研究 , 14, 53–65.
15. 秋田喜代美・辻谷真知子・石田佳織・宮田まり子･宮本雄太, 2018, 園庭環境に関する研究の展望. 東京大学大学院教育学研究科紀要 58, 495–533.
16. 今村光章 , 2014, 現代の学校教育の再考契機としての森のようちえんの意義 ―「自然学校としての森のようちえん」を手がかりに―. 環境教育 23, 4–16.
17. 菊池稔 , 2015, 地域に根ざした教育と「森のようちえん」の共有領域と課題 : 環境教育について考える , 宇都宮共和大学都市経済研究年報 , 15, 127–140.
18. 内田晋子・山本由紀子 , 2017, 保育者養成校の学生がもつ保育観の分析 : 異なる保育実践を題材に , 飯田女子短期大学教育研究論文集 , 1, 73–84.
19. ロレンツポッゲンドルフ･柴田晋吾 , 2016, フォレスト・キンダーガーティンと「自然飢饉社会」: ドイツにおけるフォレスト・キンダーガーティンの実践的レビューと日本における「森のようちえん」への示唆 . 地球環境学 12, 47–66.
20. 後藤みな, 2018, ドイツにおける幼児教育制度改革と森の幼稚園の取り組みの教育学的特質：カリキュラムの分析を中心に , 筑波教育学研究 , 16, 5–22.
21. 越中康治・杉村伸一郎 , 2008, 保護者の自然観はいかにして形成されるか？⑴「森の幼稚園」の保育者が語る現在の自然観 , 幼年教育研究年報 , 30, 49–59 .
22. 境愛一郎 , 2019, 自然環境を活用した保育への転換に伴う保育者の意識変容と葛藤：固定遊具から森へ , 宮城学院女子大学発達科学研究 , 19, 25–36.
23. 佐々木啓子 , 2019, 保育者養成における「木育」についての一考察 : 子どもにとっての木育の重要性について学生の認識を高める方法 , 聖園学園短期大学研究紀要 49, 61–71.
24. 山下慎二 , 2008, 生活科の自然体験活動における嗅覚活用能力の育成に関する研究 . 愛知教育大学生活科・総合的学習研究 6, 59–68.
25. 川喜田二郎 , 1967, 発想法 －創造性開発のために－ , 中公新書 .
26. 水谷亜由美 , 2018, 幼児はいかに友達と食べ物を分かち合うか―「森のようちえん」のお弁当場面にみる食の自律性 , 質的心理学研究 17, 164–184.
27. 金子龍太郎・西澤彩木 , 2017, 森のようちえんに通う一女児の縦断的観察 : 主体性の育ちを中心に : 3 年間記録の 1 年目 . 幼年教育研究年報 39, 71–80.
28. 柳原高文 , 2018,「森のようちえん」における園児の「アクティブ･ラーニング」および「生活科」とのかかわり , 名寄市立大学紀要 12, 11–21.
29. 牧亮太・杉山浩之・黒田愛乃 , 2016, 森のようちえんにおける子どもへの教育的効果⑵. 広島文教教育31, 59–66.
30. 水谷亜由美・今村光章 , 2014, 記述的エピソード法を用いた行事型森のようちえんの実践報告 . 岐阜大学教育学部研究報告 . 教育実践研究 16, 51–60.
31. 木戸啓絵 , 2012, 森の幼稚園の事例研究 : ホリスティック教育の観点から . 青山学院大学教育学会紀要 , 56, 23–33.
32. 社本実咲 , 2015, 森のようちえんの環境教育から学ぶ子供の保育空間の在り方 . 法政大学大学院紀要 . デザイン工学研究科編 4, 1–8.
33. 梶浦 恭子・今村 光章 , 2015,「森のようちえん」の幼児が触れる自然物に関する実証的研究 . 環境教育 1, 176–183.
34. 柳原高文 , 2019,「森のようちえん」における園児の「学び」: サイエンス・プロセス・スキルの視点から . 名寄市立大学紀要 , 13, 45–55.
35. 小鴨治鈴・松本信吾・久原有貴・関口道彦・中邑恵子・上田毅・清水寿代・杉村伸一郎 , 2017,

森の幼稚園の保育環境が小学校以降の体力・運動能力および学力に及ぼす影響 : 小学校での新体力テスト・標準学力検査を用いた長期的な影響の検討, 学部・附属学校共同研究紀要 45, 1–7.

36. 渡部かなえ , 2011, 小さな命と健康を守る―北欧と日本の森の幼稚園―. 総合文化研究所年報 , 19, 33–45.

37. 久原有貴・関口道彦・小鴨治鈴・松本信吾・七木田敦・杉村伸一郎・中坪史典・上田毅・松尾千秋 , 2014, 森の幼稚園の園児および卒園児の身体活動量と体力・運動能力との関係 . 学部・附属学校共同研究紀要 , 43, 25-33.

38. 小鴨治鈴・関口道彦・久原有貴・清水寿代・七木田敦・松尾千秋・湯澤正通 , 2015,「森の幼稚園」の卒園児の体力・運動能力の推移 . 学部・附属学校共同研究紀要 44, 23–26.

39. 金子仁 , 2015, 自然体験が育む幼児の生きる力の育成 －森の幼稚園での活動を通して学ぶこと－ . 育英短期大学幼児教育研究所紀要 13, 23–31.

40. 浜田久美子 , 2008, 森の力―育む，癒す，地域をつくる , 岩波書店 .

41. 西澤彩木・田中裕喜・菅眞佐子 , 2016, 幼児における自然環境についての学び :「森のようちえん」の活動を通して⑴ . 滋賀大学環境総合研究センター研究年報 13, 23–37.

42. 熊田武司 , 2015, 幼児向け自然体験ゲーム「かくれんぼさがし」の提案と考察 . 岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要 47, 109–122.

43. J.J. ギブソン（著）・古崎敬（翻訳）, 1986, 生態学的視覚論―ヒトの知覚世界を探る , サイエンス社 .

44. 中坪史典・久原有貴・中西さやか・境愛一郎・山元隆春・林よし恵・松本信吾・日切慶子・落合さゆり , 2010, アフォーダンスの視点から探る「森の幼稚園」カリキュラム - 素朴な自然環境は保育実践に何をもたらすのか . 広島大学 学部・附属学校共同研究紀要 39, 135–140.

45. Storli, R.&Hagen, T. L, 2010, Affordances in outdoor environments and children’s physically active play in pre-school. Eur. Early Child. Educ. Res. J. 18, 445–456.

46. Zamani, Z. & Moore, R, 2013, The Cognitive Play Behavior Affordances of Natural and Manufactured Elements Within. Landsc. Res. 1, 268–278.

47. 金子龍太郎・西澤彩木 , 2018, 森のようちえんの保育環境創出と遊びの展開―1 女児の 2 年間の継続観察を中心に―. 国際社会文化研究所紀要20, 105–119.

48. 菊田文夫・藁谷久雄・田中誉人・伊藤めぐみ , 2016, 自然体験活動を基軸とする幼児教育の現状とその展望 ―森のようちえん全国調査の結果から―. 聖路加国際大学紀要 2 , 72–77.

49. 木戸啓絵 , 2016,「森のようちえん」における他機関との連携の実態―三重県の事例から―. 岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要48, 45–57.

50. 周防美智子 , 2013, 子どものメンタルヘルスの現状と課題一 小・中学 校におけるメンタルヘルスの視点 － . 帝塚山大学心理学部紀要 , 2, 115–131.

51. 内閣府 . 我が国と諸外国の若者の意識に関する調　査 . https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/h30/pdf-index.html.（2020年12月参照）.

52. UNICEF：国際連合児童基金 . UNICEF：国際連合児童基金 .https://www.unicef.or.jp/cooperate/coop_monthly2.html?cd=pc125&utm_source=googlea_m&utm_medium=cpc&utm_campaign=monthly&gclid=EAIaIQobChMI3pnzoLbn7QIVhUNgCh1rGAtBEAAYASAAEgKSzvD_BwE.（2020年12月参照）.

53. 倉橋惣三 , 1965, 育ての心 . 倉橋惣三選集 , 第三巻 , 26, フレーベル館 .

54. 公益社団法人 国土緑化推進機構 , 2018, 森と自然を活用した保育・幼児教育ガイドブック , 風鳴舎 .

本論文の一部は保育学会第73回大会で発表されました。また，令和 2 年度四国大学学際融合研究所の助成金の支援により研究を遂行することができました。

この場を借りて御礼申し上げます。

ABSTRACT

There have been many reports connected to the activities within children's growth influenced by nature-based childcare practices. However, there have been few papers that summarize and analyze these findings.

In this study, we used the KJ method to classify and examine the content and characteristics of nature-based childcare practices from 2009 to 2019. As a result of 28 research studies, it was established that 12 characteristics such as independence, self-affirmation, cooperativeness, and creativity were amongst the major qualities nurtured by nature-based childcare practices.